

打消接続法の記述方言地理学的考察

— 中部地方域方言について —

江 端 義 夫

(1984年9月10日受理)

A Descriptive Dialect-Geographical Study of a Negative-Connective Phrase — On Dialects of the Chubu Area in Japan —

Yoshio Ebata

In this paper the author interprets dialect distribution maps of the negative-connective phrase of Chubu District, Japan using the Descriptive Dialect-Geographical method developed by the author. He proposes Descriptive Dialect-Geography has a combination of social linguistic study and a dialect geographical study.

The following results were found :

- 1) IKANTO "without going to" is distributed over Kinki and Hokuriku areas. It's distribution will spread to IKANDE area in the eastern part. IKASUTO belongs to this group.
- 2) IKANDE is distributed among 6 prefectures of Chubu area, omitting Hokuriku area. This word has been located for a very long time. IKANANDE belongs to this group.
- 3) IKASUTO was formed by mixture of IKANTO and IKAZUNI. This is distributed among Aichi, Gifu, Shizuoka, and Nagano prefectures.

The distribution of IKASUTO and IKANANDE are opposed to each other putting the Hida mountain range between the two.

はじめに

文中で、いったん表現内容を打消し、話題を新しく展開させる用法を持つのが、打消接続表現である。「～しないで～」のような発想法のもの言いが、本稿の注目点である。

文法は表現の現実を支えられて立つ。諸多の打消接続表現は、まさに、打消接続法の実践である。

中部地方域方言について、打消接続法の実態を、記述方言地理学的方法に基づいて、以下に考察する。

(記述方言地理学は、筆者が独自に使いはじめた術語である。その思惟の小実践が、「禁止表現の多元的分布—中部地方域方言について」(雑誌「国語学」125, 1982)である。筆者の小構想は、次の拙文に記している。「記述方言地理学の理論的基礎」(「広島大学教育学部紀要」第2部32, 1983)。また、ドイツの雑誌には、Dr. Günter Bellmann が、論文“Deskriptive Sprachgeographie in der Gegenwart” (Rheinische Vierteljahrs Blätter, 46 1982) を書いている。)

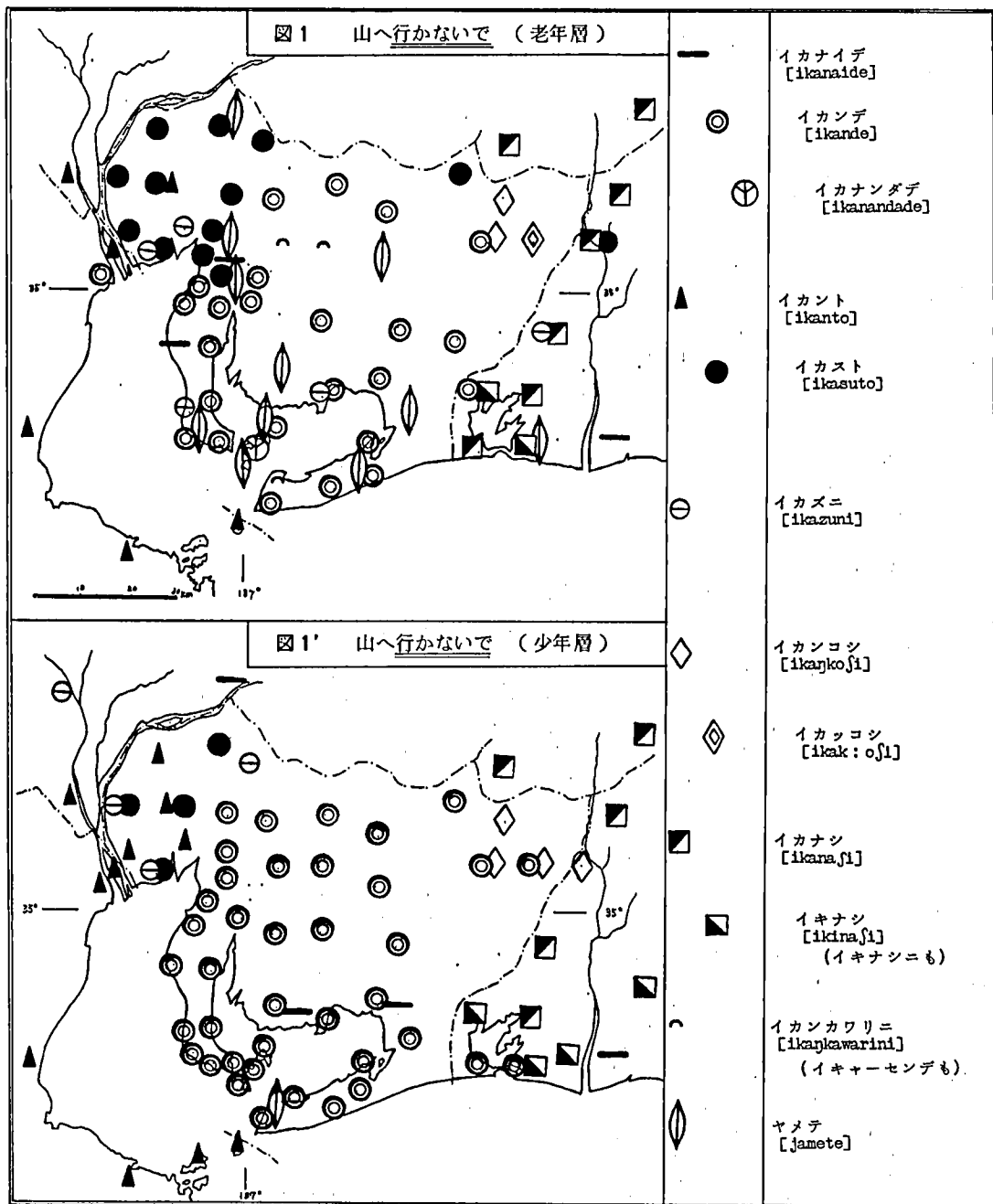
本稿で考察する打消接続法は、「山へ行かないで、海へ行こう」と人を誘う文表現の脈絡において、「山へ行かないで」の下線部に相当する言い方を問題とする。これは、動詞「行く」の未然形に、打消の助動詞「ない」が接続し、更に、それを接続助詞の「て(で)」が承接している。

I 愛知県地方域での打消接続法「山へ行かないで」の分布

図1, 1' は、老少年層者が、「山へ行かないで」の言い方をどのように表現しているかについて、方言事象分布図を描いたものである。

①<イカナイデ>

当該地方の日常生活においては、「イカナイデ」が極めて稀にしか使用されない。土人同士の会話で、「イカナイデ」を用いれば、そらぞらしい特別の効果が生じる。



②<イカンデ>

愛知県地方で最も盛んに使用されるのが、「イカンデ」である。当該地域に、広く、否定辞の「ン」が行き渡っており、一般的である。「ナイ」でなくて、「ン(ぬ)」という打消の助動詞を用いる言い方が、基底にある。少年層図においても、「イカンデ」の分布量は増えている。当該地方の人々に抵抗感なく受け入れられる自然なもの言いとして、「イカンデ」が存するのであろう。

代表的な事象と言える「イカンデ」に相当する実例を、自然会話の中から見出し、以下に掲出する。

この会話は、1965年9月23日に聴録した。場所は、愛知県知多市南粕谷である。話者Aは、平野銀之助(80歳)で、Bは筆者自身である。方言会話は少し長いけれども、「イワンデ スギヤ」の前後を含めて記述する。

A ソーダンセヤ ナントカ ヘントーセンナラン。
(長男が私に)相談すれば(私)はなんとか返答しなければならぬ。

B ンー。うん。

A コー シダガ エートカ アーセル、ヘントーセンナランケドモ。ナーニモ ソーダンセラニヤ シラン カオ シテ アニーガ ケツマズイテ コロピヤガッタ ヤー イタカッタダラーズ ナート オモッテ ヘリデ(笑)…ソリヤ ミトル サー。イコ アミーガ ケツマズイテ コロボト オモヨナ コトガ デル ワノ。

こうした方がいいとか、あのようにするなど返答しなければいけないけれども。なにも長男が私に相談しなければ、知らない顔をして、兄(長男)がしくじって、ころびゃがったら(失敗したら)、やあ痛かったらうなあとと思って、端で(笑)、それは見ているよ。時に、兄(長男)がつまりてころぶと思うようなことがあるわい。

B デル。ある。

A ソリヤー ホントニ シンケツワ…(不明)ザイセーノ シンショニ ケツマズダ ワアー。
それは、本当に…(不明)。財政の身上(家庭の経済)につまずくのだな。

B アー。なるほど。

A アー。ソソチヨナ コト ヤツテク ゼ。ワカイモノワ。そうだ。そんなようなことを、やって行くよ。若い者は。

B ソーダ 〴。そうだね。

A ダケド セワオ ヤカン。ナンニモ イワンデ スギヤ マー ミタランナラン ワ。だけど、世話をやかない。何も言わないで、時がすぎれば、まあ見てやらなくてはならないさ。

B ンー。ソーソー。うん。そうそう。

A イマ チョーシガ エーケド コイデ ケツマズクヨナ トキガ グルガ ナート オモッテ ミトルト……。今、調子がいいけれど、これでつまりくような時が来るかなあと見て見ていると、……。

B マタ クチダシスルト アトデ マタ アー。ヤッテ ヤランナランデ。また、口出しすると、後でまたねえ。やってやらなくてはならないから。

A ソヤ ヤッテ ヤランナラン。アーン。ダケド ナーニモ ナケヤ ドースル ワケニモ イカンモンダデ マー ヨシダデ エー ゼ。それは、やってやらなくてはならない。はい。けどなにも(金が)なければ、どうするわけにもいかないから、もうよし(結構ということ)だから、いいんだよ。

話者Aの人生観が、明治人らしい気骨で語られている。長男の自立のためには、親は助言や金銭的援助を、むやみに与えるものではない。親は、じっと見すえて、子の動静を見守っている方がよいとする教育思想である。自覚的であり、冷静である点に、80歳の人生の重みを感じないではいられない。

「イカンデ」に類似する「イワンデ」の例を記述した。方言会話を、まるごと、根つき土つきで取り上げてみた。これは、一つの試みである。筆者は、「イワンデ」の認められる話の流れを取りあげる記述法が、方言会話そのものを単位として取りあげてゆくことを考える記述方言地理学における当為の一方法だと考えている。

③<イカナンダデ>

愛知県地方域においては、「イカナンダデ」の意味は、「行かなかったので」である。老年層図で、日間賀島の一地に、「イカナンダデ」が「行かないで」に当たる事象として答えられた。しかし、筆者はこれを地図には描き出したけれども、話者の勘違いによる誤答であろうと解釈している。

④<イカント>

近畿中心の分布を見せる「イカント」は、愛知県の老年層図では、尾張の一地点に見られるだけで、三河や遠江には無縁の事象である。ところが、少年層図を見ると、「イカント」が尾張の北部の平野で、分布域を広げてきている。少年層者が、共通語的な「イカナイデ」よりも、近畿的な「イカント」の方を選んでいることを、特筆したいと思う。

⑤<イカスト>

中部地方での著名な言い方の一つに、「イカスト」がある。「イカスト」は、その後述部を承接させてはじめて、意味が定まる。「イカスト」における「ス」は、否定の助動詞「ズ」の清音化した形と解される。もとの形は、「イカスト」であろう。

⑥<イカズニ>

老年層でも少年層でも、尾張北部地方で、「イカズニ」と「イカスト」とが併存している。

⑦<イカンコシ><イカッコシ><イカナシ><イキナシ>

老年層と少年層との双方で、奥三河から遠江にかけて、これらの事象が、まとまった分布を見せる。三重県域や尾張、西三河地方には、これらの分布が見られない。

「イカナシ」「イキナシ」では、「ナシ」が否定辞の「ナ(無)シ」であることは、容易に理解される。

打消接続法の発想について、奥三河や遠江では、「～ナシ」の言い方を選択した。

⑧<ヤメテ>

「山をやめて」のように、まったく、別の動詞を用いた言い方がある。老年層図に、これが多い。「ヤメテ」の得られた地点には、他の事象との併存状況が、かなり見出される。

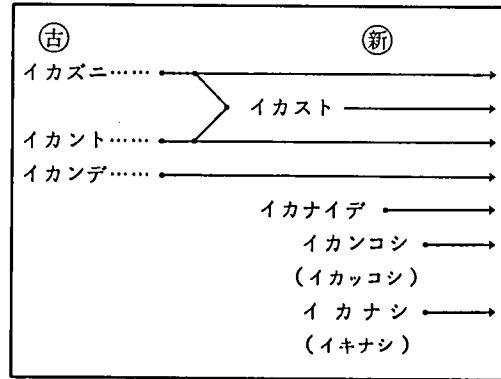
⑨<イカンカワリニ><イキヤーセンテ>

老年層図の2地点にしか存しない稀少事象である。「イカンカワリニ」は、「行かない代わりに」の義で、論理的には筋が通らない。しかしこれで、「山へ行かないで」の義と解して疑わないのが、聞く生活の興趣深い面であろう。たとえば「薬を飲む前に」というのを、「飲まない前に」とか言ったりすることがあるのと同じである。否定辞は、「否定の姿勢」「否定の構え」くらいの意味しか持たないことも多いと、筆者は考えている。

以上の諸事象の分布相について、方言事象関係史を考えれば、次のとおりである。

中部地方域には、古くから「イカンデ」があった。そこへ、共通語の「イカナイデ」と新しい発想法の「ヤメテ」が入ってきた。その後、水際立った斬新さで「イカント」が近畿地方を中心に、北陸地方まで広まった。かくて、近畿・北陸地方の「イカント」と中部地方の「イカンデ」(この中には後述の「イカナンデ」も含まれる。)との激しい対立が長く続いて、今日に至っていると解される。その間に、「イカズニ」は、「イカント」の影響を受けて、「イカスト」を尾張地方で生み、それが「イカスト」の形で定着した。打消接続の枠型を「～ニ」から「～ト」へ変えて、新しい事象を創り出したのであろう。従って、「イカズニ」も古くからの事象であることは確かである。

さて、これらを総合して、方言事象の新古関係をまとめれば、次のとおりである(「ヤメテ」は、別の発想法によるので、同列には処理しないことにする。)。表現法の諸事象は、音声事象や語詞事象と異なって、



排他性が弱いと言えよう。同一地点に複数事象が存した場合、一方が他方を駆逐するというのが生存競争の原理だとすれば、「行かないで」の分布図は、異例とさえ思えるありさまである。上表のまとめは、古から新への事象史であると共に、複数事象の共存史であるとも言えるのである。

次に、打消接続法の一つに、「～をしないで来た」というときに、「～をシコナシデ来た」「～をヤリコナシデ来た」と答える特殊な表現法がある。この表現の印象を、よその土地人に尋ねると、それは極めて滑稽に映るという。以下では、この言い方の分布図を取りあげる。

II 愛知県地方域における打消接続法「鳥かごをシマイコナシデ来た」の分布

先の図1、図1'では、「行きコナシデ」の事象が見られなかった。「山へ行かないで、海へ行こう」という文脈上では、「～シコナシデ」の表現が見られない。打消接続法の微妙な様態を識別するために、方言会話を引いて、運用の実態を考察してみることにしたい。

以下に記述する方言会話は、先述のと同様で、1965年9月23日、愛知県知多市南粕谷で、話者A平野銀之助(80歳)、聞き手B(筆者)、同席者C江端源三郎(84歳)による気儘な世間話である。「カマイコナシデ」という表現が、注目点である。

A sorekara ma:çito:tsu sonohen'e itre

fufiginatō omō: kotowa no.: ma: idote:to-saiga a: haf:akuguraino idobak:ada wa. taigai nō:. それから、もう一つ、その辺へ行って不思議だと思ふことはねえ。もう、井戸といえば、もう、8尺ぐらいの深さの井戸ばかりだよ。たぶんねえ。

B idoga ja. 井戸がねえ。

A a: dakedo soreo çitorigiride hotf:imauze. so reo. うん。だけど、それを一人だけで畑ってしまうよ。

それを。

B *çitoride*. 一人でかね?

A *a: çitorigiride hotf:imau, daremo kamaiko-nafide, hode hotf:imaautosai ma: doromade arafin ze.* うん。一人だけで掘ってしまう。誰も手助けせずに。それで、井戸を掘ってしまうと、泥までなくなっているよ。

B *do:fitei*. どうしてなの?

A *dokoe tondetf:imau firakedo.* どこへ(泥が)飛んで行ってしまふか知らないけれど。

B *ho: hohou* (驚いて)。

上記の方言会話では、8尺の井戸を一人だけで掘ってしまう人についての話題が、語られている。話者Aにとって、これは余程感動的であったとみえて、「ア-ヒトリギリデ ホッチマウ。ダレモ カマイコナシデ。」と、興奮がいわゆる倒置法で述べられる。「ダレモカマイコナシデ」という説明のことばは、「ヒトリギリデ ホッチマウ」という異常な事実を強調し、補足する働きをしている。意外なことからへの感動、不思議なことからについての感興、偉業への讃美などが冒外に迷り出ている。行為の動機や意図を、打消接続法によって説明するとき、「〜シコナシデ」の言い方は、実に適切な事象だと言えよう。

図2, 図2'は、「鳥かごをシマイコナシデ来たので、雨が降るトサイが濡れてしまふなあ」という文脈で、尋ねられている。「鳥かごをしまわずに来た」というのを、「鳥かごをシマイコナシデ来た」と言うか否かが、まず第一に質問されている。立木の印、つまりYの符号が、その事象を積極的に言う、と答えた地点である。その他の符号は、「シマイコナシデ」を言わないとすれば、その代わりにどう言うかが答えられた。その結果は、当然図1, 図1'と重複する。ここで最も大切なことは、「シマイコナシデ」の言い方が図1, 図1'には、皆無であったという点である。鳥かごを戸外に出したままで外出したとき、急に雨模様になった。今にも雨が降りそうだ。そんな状況で、「鳥かごをシマイコナシデ来た」と表明されるのである。

図2の老年層図では、愛知県全域に、色濃く「シマイコナシデ」の分布が看取される。出自は、「しまふ事(または、しまい事)(も)無しで」であろう。縮約化の末に、軽快な響きのある「〜(動詞連用形)コナシデ」が慣用化したのであろう。これが、中部日本的な言い方として定着した。

ところが、少年層図では、この事象の分布が極端に減少してきている。筆者には、それが意外に思えた。東京地方のわらべうたの「ずいずいずっころばし」には、「お父さんが呼んでもお母さんが呼んでも行きっ

こなァし(よ)」とある。「〜こなァし(よ)」は、子供の慣れ親しむ言い方に違いない、と確信していた。だが、図2と図2'の間における「シマイコナシデ」の分布量の激減は、顕著である。特殊な表現は、成熟しきった後、減っていくものであろう。図2から図2'への推移を、他の事象の代替現象と解するのではなく、筆者は「熟成分布の自然淘汰」という解釈を打ち出してみたいと思う。従ってこの現象は、各地の地方語の盛衰の有様にも、転じて考えうることである。土地に代替しうる許容範囲内の事象があるとき、地方色の濃い言い方が、熟成分布に至っているならば、その分布は少年層者に受け継がれることなく、自然淘汰の途をたどる、と言えよう。

以上が、愛知県地方域における打消接続法の分布についての考察であった。

さて、愛知県は中部地方の一隅に位置している。それでは、如上で考察した諸事象が、広く中部地方域内で、どのように認められるかを、次に考えてみたい。

III 中部地方域での打消接続法「山へ行かないで」の分布

図3では、打消接続法に関する、比較的明瞭な分布を読みとることができる。諸事象の分布を踏まえ、相関性を表示すれば、次のような諸事象の組織表が得られる。

1. 諸方言事象の組織表

	<機能>	<特徴>	<分布地点>
①行動否定の持ち掛け	}	〜ナイ〜 (ナク)	(新潟県・長野県・山梨県・静岡県・愛知県・岐阜県)
		〜ン〜	シデ(新潟県・岐阜県・愛知県・長野県・静岡県) シト(長野県・石川県・富山県・新潟県・岐阜県)
		〜ナン〜	(長野県・山梨県)
		〜ズ〜 (ズ)	(岐阜県・愛知県・静岡県)
		〜ナシ〜	(静岡県)
		〜コニ〜 (〜コシ)	(山梨県・静岡県)
②行動制止の持ち掛け	}	ヤメテ (停止)	(静岡県・愛知県・岐阜県)
		ヨシテ (制止)	(静岡県・長野県)
		オイテ (中止)	(岐阜県)
③代替行為の持ち掛け	}	イクヨリ (比較)	(静岡県)
		イカン(カ)ワーリ	(石川県)

(注) 不明・イキッコロセテ(もとは、イクトセシデではいいか?)

図 3

山へ行かないで(老年層)

「山へ行かないで、海へ行こう」という言い方は、どう言いますか。

イカナイデ
[ikanaide]

イカナクテ
[ikanakute] 328

イカズニ
[ikazuni]

イカンド
[ikando]

イカナンド
[ikanande]

イカント
[ikanto]

イカスト
[ikasto]

イキナン
[ikina, n] 122

イキッコニ
[ikik: oni] 213



イッコシ
[ik: oji] 115

イカンワーリ
[ikanwa: ri] 915

ヤメテ
[jamote]

オイテ
[oite]

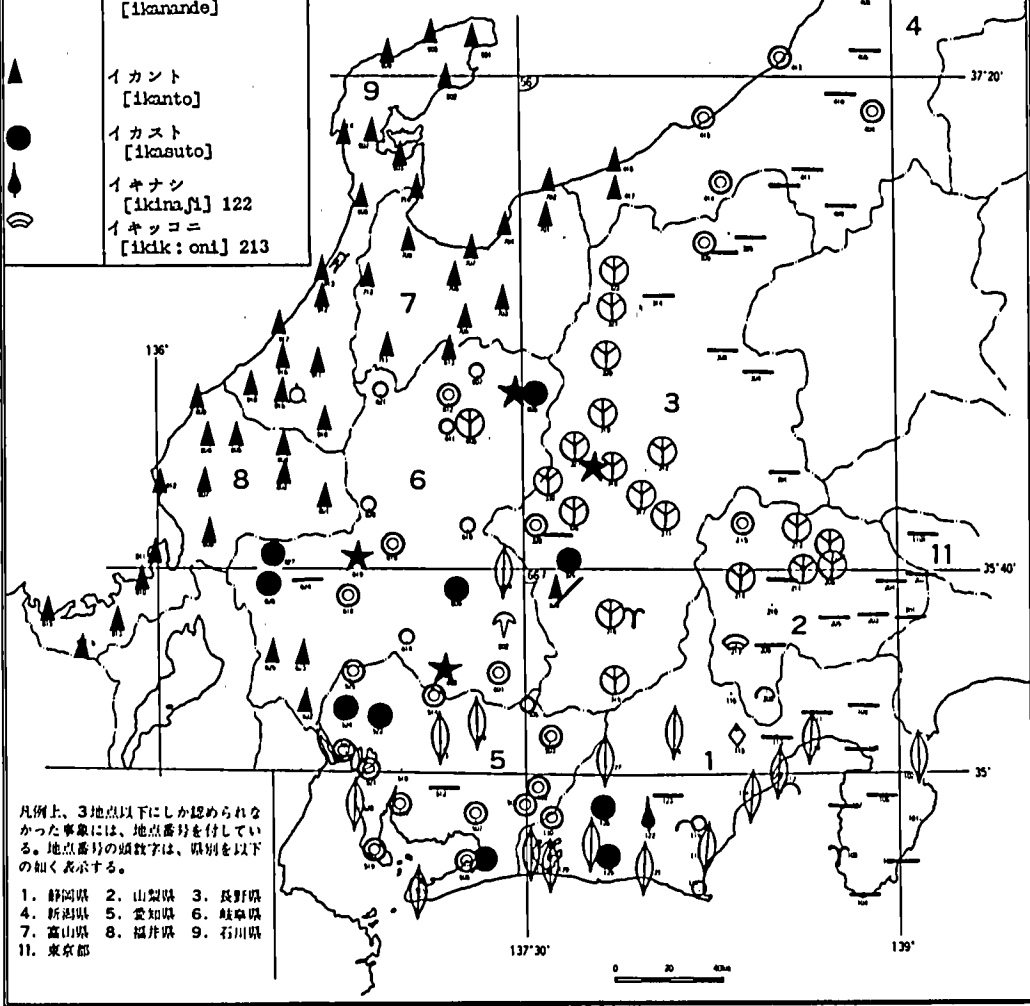


ヨシテ
[jo: site] 106, 316

イキッコロセーテ 602
[ikik: obose: te]

イクヨリ
[iku: jori] 112, 119

(注) 次下は符号化していない。
イヤダンテ 116



凡例上、3地点以下にしか認められな
かった事象には、地点番号を付してい
る。地点番号の頭数字は、県別を以下
の如く表示する。

- 1. 静岡県
- 2. 山梨県
- 3. 長野県
- 4. 新潟県
- 5. 愛知県
- 6. 岐阜県
- 7. 富山県
- 8. 福井県
- 9. 石川県
- 11. 東京都

上の表で明らかのように、中部地方域では、「山へ行かないで」を発想しようとする場合、まず、④「行動否定の持ち掛け」に関わる諸事象を選んで、「行かないで」に相当する言い方を、土地ごとに教えてもらったわけだから、行動否定の持ち掛けに関する事象が全体的に多くなるのは当然である。

しかし、それでも③「行動制止の持ち掛け」の中の「ヤメテ」は、図3で知られるように、分布量がかなり多い。「山へ行かないで」と言うよりも、「山をヤメテ」という方が、単刀直入であり、事柄が明確に直覚できる。この言い方が、隆盛な分布を示していることに、新しい時代の兆候を感じないではいられない。

ところで、⑤「代替行為の持ち掛け」は、前二者に比べて、控えめな発想法と見える。これの分布は、極めて少ない。日常の言語生活上では、おそらく、よく聞かれる表現にはちがいない。しかし、質問項目に答えてもらうという調査の際には、これが附随的にしか得られないようである。

さて、行動否定の持ち掛けの諸事象について、以下で具体的に検討してゆくことにする。

2. <イカナンデ>と<イカント(イカストも)>と<イカズニ>との相剋

中部地方域の当該項目で、分布域を代弁する事象をあげれば、「イカナンデ」「イカント(イカスト)」「イカズニ」であろう。これらの相剋の様子を、記述方言地理学的に考察することが重要である。

①<イカナンデ>

図3では、「イカナンデ」の分布が、長野県中心に認められる。山梨県内にも、長野県に隣接する地域に色濃く、「イカナンデ」の分布がある。他方、神奈川県や静岡県に面した山梨県東南部では、もはや「イカナンデ」の分布は見られない。そこでは、「イカナイデ」という共通語的な言い方ばかりになっている。従って、長野県に強力な分布の核心を持つのが、「イカナンデ」の特色であることが分かる。飛んで岐阜県の飛騨の一地にも、「イカナンデ」の分布が見える。飛騨にも、古くは、もっと広く「イカナンデ」の分布が存したであろう。

「イカナンデ」は、「イカナイデ」と「イカンデ」との共存する接点地域の山間部で生じた混交形であろうと解される。

ika[na]ide + ika[n]de = ika[na]de

(甲) (乙) (甲と乙との混交形)

方言の接衝地域では、上掲のように甲と乙との混交の呼称を編み出す例は多いのである。おもしろいことに、

「イカナンデ」の言い方を生み榮えさせているのは、東西二大方言の文法項目の分布の境界と書かれて久しい飛騨山脈の東添いの南北に連なる地域である。このことは、象徴的に、方言の歴史的事実を物語っているようである。

「イカナンデ」の実例をあげれば、次のようである。主に長野県の本木曾路での用例である。

○ノーキョーガ デキテ グローウ セナンデ スムカラ ネー。農協ができて、(買物などの)苦勞はしなくて済むからね。(老男→筆者)長野県本木曾路野馬追, 1974

○エ[e]マー タノマナンデ……。今は誰にも頼まなくて。(老女→筆者)長野県本木曾路桐川村字穀川, 1974

○ウチオ カマッテ イルヨーナ コトカ デキナンデ……。家をかままっているようなことができなくて。(老女→筆者)同上

本木曾路を塩尻へ向けて北上するにつれて、「イカナンデ」などの「~ナンデ」の使用が、しだいに増していく。長野県の中央部に位置する和田村では、頻繁に「~ナンデ」が聞かれる。

○オヤジノ カネワ モラナンデ ネー。おやじの金は、もらわなくてね。(老男→筆者)長野県小県郡和田村上和田, 1974

○シラナンデ サー。知らなくてさ。(老男→筆者)同上

○コトバカ ワカランデ ネー。ことばが分からなくてね。(老男→筆者)同上

○ヨンダー カゼオ アデナンデ……。今度は風を当てなくて(榎蔭栽培)……。 (中男→筆者)同上

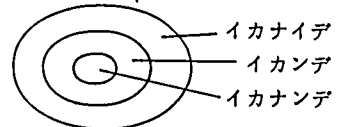
○カガナンデ トバジチャッタング ネ。昔かなくてとばしてしまったんだね。(老男→筆者)同上

○エ[e]レテ ネーダ。ベツニ チニモ タベテナンデ……。入れてないのだ。別に、何も食べてなくて。(老男→筆者)同上

○ワダワ ガッペーニ ナラナンダ……。和田村は、他村と合併にならなくて。(老男→筆者)同上

○カンデー カゲナキャ コーヒョー デキナンデイル。鑑定をしなくては、公表できないののだ。(老男→筆者)同上

この「イカナンデ」類は、中部地方の全域を眺望して把握するならば、「イカナイデ」が外周にあり、その



内側に「イカンデ」、更に「イカナンデ」が存するという構図を成している。「イカナンデ」が、「イカンデ」と「イカナイデ」との混交から生じた新事象であることを、分布状況から確かめることができる。

②<イカント(イカストも)>

図3で、北陸三県において、「イカント」の顕著な分布が認められる。それらに隣接する岐阜県と新潟県とともに、それがわずかに分布する。飛んで、長野県の南部の一地に、「イカント」が分布している。「イカント」は、典型的な近畿・北陸地方の特色を示す事象である。

先に図1, 図1'で、「イカント」の分布領域が明瞭で、しかも分布勢力は、しだいに東の方へと伸長していることを指摘した。中部地方の方言においても、「イカント」の分布は北陸や近畿に堅固である。北陸の石川県における「イカント」の類例は、次のとおりである。

○デテ ヨシ, デン下デモ ヨシ。マラソンに出てもよく、出なくてもよい。(老女→筆者)石川県石川郡美川町神幸町南, 1976

○アンナ シェント エーカ[・]オー。あんなにしないでいいのに。(老女→向)石川県輪島市野野町曾々木, (バスの中), 1976

近畿・北陸的な方言分布の中心には、京都がある。次に、京都のことは見ることにする。

○セント オキ ヤー。ホソマニ。しないでおきなさいよ。ほんとうに。(老女→子供)京都市下京区, 1975
このように、禁止の言い方が「～しないでおく」の如く婉曲に表現されて、相手へのあたりを柔らげる機能が醸成されている。従って、図3における「イカント」は、古くからの分布でありつつ、隣接諸県へその分布を拡大させており、強靱である。

「イカスト」については図1, 図1'でも検討したが、「イカズニ」+「イカント」によって生じた混交形であることが、明瞭である。

ikazuni + ikanto = ikasuto (zu)

「イカスト」が「イカント」の分布領域と連続して、岐阜県、愛知県、長野県、静岡県へと伸展している。「イカスト」は、「イカズニ」や「イカント」よりも新しい語形であろう。

「イカスト」の分布は、図3の黒丸符号をつないで枠を作った範囲が、およその限界域であろうと予想される。もはや「イカスト」の分布が長野県の奥深くや静岡県の中東部へと拡大してゆくことは考えにくい。また、北陸では、「イカント」を固守して、「イカスト」を併用する気配さえも見られない、という事実が注目される。

③<イカズニ>

たとえば中部地方域で、

○ニジュ[・]ヨシカゲツテンケンオ ウケトキャー
シャケンモ セズニ ソノマンマ モツテキャー

トール ワケダ。24ヶ月点検を受けておれば、車検もせずに、そのまま持っていけば通(用す)るわけだ。
(老女→息子への電話)長野県木曾郡木曾町馬場, 1974
○ヨソエワ デズニ[・]……。他所へは出ないでかい?
(老女→息子への電話)同上

のように「～ズニ」の実例が開かれる。しかし、それは多くない。この打消接続法は、古めかしく格式ばった感じがあり、電話や書きことばには相応しいようである。しかし、気取る必要もなく、さらりと物語りたい時には、中部地方域では諸種の表現形式が豊富に存するので、それらの中から適宜に選択しうるのであろう。岐阜県では、「イカズニ」が、かなり多くまとまって分布している。これは、この地が、新旧の諸事象を保存せしめることになった地理的文化的事情によるものと思われる。

3. 助辞承接相

打消接続法は、図3によれば、「イカナイデ」類、「イカント」類、「イカズニ」類に分けられる。そこで、図4では「行かないで」における終末部に注目して、諸事象の分類整理をし、分布図を作り直してみた。これは、(動詞+助動詞+助辞)の表現形式における助辞の部分に視点を定めた分布図である。

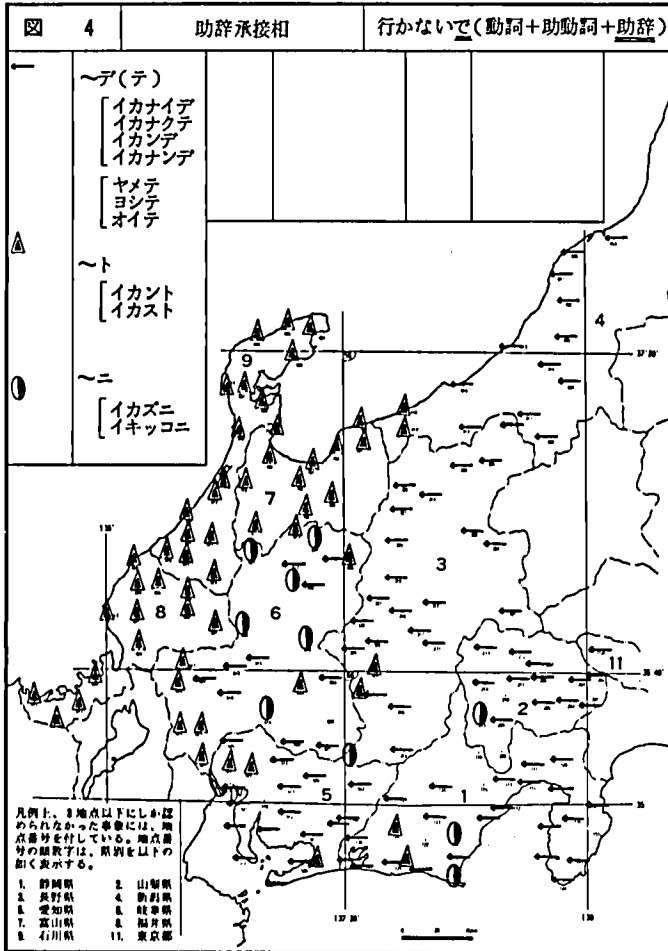
図4によれば、線系の符号による「～デ(テ)」の広大な分布領域が、まず、中部地方域の代表的なものであることが理解されよう。この中には、凡例で見られるように、「イカナイデ」「イカナクテ」「イカンデ」「イカナンデ」があり、別な発想法の「ヤメテ」「ヨシテ」「オイテ」も含まれている。「～デ(テ)」助辞を使用した事象は、新潟県、長野県、山梨県、静岡県、愛知県、岐阜県に分布する。

次に、三角形の符号で示された「イカント」などの「～ト」の分布領域は、「イカント」と「イカスト」とで醸成されている。北陸の三県がその分布の中心であることは、上述した。注目すべきは、岐阜県と愛知県と静岡県とに、「～ト」の分布が散在することである。「～ト」は、確実に西から東へと前進している。方言周圏論は、都である京都のことは地方へ伝播することを説明する原則であった。京都の文化「～ト」は、昔と変わらず、西から東へと伝播しているのである。

ところが、共通語的な「イカナイデ」の勢力は小さいけれども、図3や図1'で見られるように、「イカナンデ」や「イカンデ」の伝播力は強大である。

「～デ(テ)」は、東から西へと攻め進んでいると言える。「～ト」と「～デ(テ)」と衝突する地域が「愛知県・岐阜県・親不知」である。境界線などと言えるものではない。それは、非常に幅の広い、南北の帯状

ということである。



おわりに

中部地方の方言における打消接続法に関して、記述方言地理学的考察を試みた。従来の欧米における方言地理学(言語地理学)が単語地理学中心であったのに対して、筆者は、共時的体系記述を導入した社会言語学的な方言地理学をねらっているのである。しかし、構造言語地理学のような体系認識の硬直性には、与し得ないのである。

筆者の考える記述方言地理学は、記述言語学における“記述”とも、ずいぶん異なっていることが知られると思う。筆者は、方言分布図の解釈のために、社会的事実としての方言の総合的記述法を、説明原理として打ち出していきたいと思う。

文法項目が方言地理学の領域で、実質的に解釈されだしてから、あまり多くの年月が経ってはいない。単語や音韻については、音韻法則の適用が、かなり容易であったであろう。筆者は、文法項目の方言地理学的解釈についてはいっそう、記述方言地理学的と云えるような考察の仕方が必要であり、それが有意義であると考えているのである。(1984. 9. 1)

<付記>

最後に、方言研究の方法と精神を、全身全霊でお教え下さった藤原与一博士、科学的な言語地理学の方法をご教示下さった柴田武博士、厳正に言語事実を見分ける態度をお教え下さった小林芳規博士に心よりお礼を申しあげる。

<摘記>

近年、筆者は記述方言地理学的考察を推進することに努力している。まだ、その理論化の途中であるが、筆者の構想を理解していただくために、筆者の拙い仕事のうち、中部地方方言に関するものを、以下に書き出してみたいと思う。

- ①中部地方の方言についての方言地理学的研究(I)(「広島大学教育学部紀要」第2部第25号, 1977),
- ②中部地方方言の推量表現の分布について(「国語学」110集, 1977),
- ③中部地方の方言についての方言地理学的研究(II)「海へ行こう(勧誘表現)」の分布とその考察-(「広島大学教育学部紀要」第2部第26号, 1978),
- ④中部地方の方言の打消過去表現について(「言語研究」第73号, 1978),

の地帯として認出されるのである。

また、「~ニ」の丸形符号が、「~デ(テ)」と「~ト」との分布の交叉する中部地方の中軸部に点在している。特に、岐阜県にそれが多く見られる。「~ニ」の分布する地点は、地理的な辺境が多い。古い形を残し、「~デ(テ)」や「~ト」の分布を受け入れず、留まっていると言えよう。「~ニ」が増えるとは思えない。「~ニ」の分布が、脈絡をもって繋がっているのではなく、造語形式の共有による条件反射的な一致によるのかと思われる。

中部地方域は、「~デ(テ)」と「~ト」とのせめぎあいとして把握することができる。「~ニ」は、この際、考慮しなくても、さしつかえないであろう。二事象の分布対立の状態は、今後も殆んど急速には変わることなく、留まるであろうと考えられる。すなわち、図4で見られる分布状況の概要は、久しく維持される

⑤「が」準体助詞の遺存分布考—主として中部地方方言について—(「国文学攷」第79号, 1978), ⑥禁止表現の多元的分布—中部地方方言について—(「国語学」125集, 1981), ⑦中部方言の語アクセントの地理的分布考(「音声の研究」19, 1981), ⑧「シャル」敬語法の分布の新化方向—中部地方方言について—(「藤原与一先生古稀記念論集 方言学論叢1」1981), ⑨中部方言の語彙(「講座方言学」8, 1983), ⑩記述方言地理学の理論的基礎(「広島大学教育学部紀要」第2部, 第32, 1983)

参 考 文 献

藤原与一著『方言学原論』(三省堂, 1983)

柴田武著『言語地理学の方法』(筑摩書房, 1969)

W.A. グロータス著『日本の方言地理学のために』(平凡社, 1967) 1976)

徳川宗賢編『日本の方言地図』(中央公論社, 1979)

馬瀬良雄『上伊那の方言』(上伊那誌刊行会, 1980)

国語調査委員会編『口語法分布図』(国定教科書共同販売所, 1903)

Günter Bellmann; Deskriptive Sprachgeographie in der Gegenwart, Rheinische Vierteljahrs Blatter, 46, 1982.